

住吉っ子



天のしたのとけか
るへしなには鴻たみ
乃の島にみそまへし
都礼婆

第46代住吉神主津守経玉の歌

住吉大社宮司道弘かく



後鳥羽院の御時、八十島の祭に詠みはべりける歌

天のした のどけかるべし

難波鴻

田蓑の島に

みそぎしつれば

津守経国

住吉大社宮司 高井道弘 書

「国難」

今回の感染症拡大において、現場で奮闘せられる医療関係者の各位、食料品や生活必需品の物流や販売に従事されたすべての方々に対して深い敬意を表します。そして、なにより社会的自粛による影響で多くの困難に直面しておられる皆様方に対しまして、心よりお見舞いを申し上げます。

新型コロナウイルス禍の中、緊急事態宣言の発出、それにとまなう社会的な外出自粛が求められる状況を受けてまして、当社でもご参拝の皆様、並びに職員等の安全と感染拡大の防止のため、瑞垣



内および外周門の閉門、祈祷や神符など来社受付の停止をやむなく実施いたしました。そのため、日々信仰を寄せていただいている崇敬者の皆様には、ご不便をお掛けいたしましたことお詫び申し上げます。

かつて、天皇陛下のご即位の翌年には、難波の海において八十島祭という天下の禊祓が行われてきました。大阪湾は国生み神話の舞台でもあり、日本の禊祓をつかさどる神聖な海でした。もとより、住吉大社は禊祓（おはらい）のご神徳をもって難波の海辺にお祭りされ、住吉祭（荒和祓）をはじめ国中の御祓のために祭祀が行われてきた歴史があります。

私ども神職ができることは一日も早い終息を祈ることばかりですが、日毎神前にお祓い熟禱を捧げています。諸祭儀にご参列はいただけずとも、諸々の祭儀は粛々と奉仕してまいる所存です。

天皇	即位儀	大嘗祭	大神宝使	八十島祭	仏舎利使
文 徳	嘉祥3・4・17	仁寿1・11・23		嘉祥3・9・8(文実)(前)	
清 和	天安2・11・7	貞観1・11・16			
陽 成	元慶1・1・3	元慶1・11・18			
光 孝	元慶8・2・23	元慶8・11・22		仁和1・4・7(帝王編年記)①	
宇 多	仁和3・11・17	仁和4・11・22	仁和4・11・8(日本紀略)		寛平の例、あり(貞信公記)
醍 醐	寛平9・7・13	寛平9・11・20	昌泰1・8・23(日本紀略)①	昌泰1・6・28(日本紀略)①	延喜の例、あり(貞信公記)
朱 雀	延長8・11・21	承平2・11・13	承平2・9・22(日本紀略)	承平3・6・25(日本紀略)①	承平、なし(貞信公記)
村 上	天慶9・4・28	天慶9・11・16	天曆1・4・20(日本紀略)①	天曆1・11・30(紀略・貞信)①	天曆2・9・22(日本紀略)②
冷 泉	康保4・10・11	安和1・11・24	安和1・10・20(日本紀略)	安和2・5・21(日本紀略)①	安和2・5・26(日本紀略)①
円 融	安和2・9・23	天禄1・11・17	天禄1・11・11(日本紀略)		天禄2・10・28(日本紀略)①
花 山	永観2・8・27	寛和1・11・21	寛和1・11・15(紀略・小右記)		
一 条	寛和2・6・23	寛和2・11・15			永延1・9・27(日本紀略)①
三 条	寛弘8・6・13	長和1・11・22	長和1・12・19(紀略・御堂関白記)	長和2・10・29(御堂関白記)①	
後一条	長和5・1・29	長和5・11・15	寛仁1・10・2(御堂関白記)①	寛仁1・12・12(左経・小右)①	寛仁2・10・11(小右記)②
後朱雀	長元9・4・17	長元9・11・17		長暦1・9・20(平記)①	長暦2・6・15(扶桑略記)②
後冷泉	寛徳2・4・8	永承1・11・15			
後三条	治暦4・7・21	治暦4・11・22	延久1・10・7(江家次第)①	延久1・10(江家次第)①	延久2・11・17(扶桑略記)②
白 河	延久4・12・29	承保1・11・21			承暦1・6・24(水左紀)③

八十島祭と古代の祭祀

岡田 莊司

はじめに

八十島祭は、天皇代替わりごとに大阪湾に注ぐ淀川の河口、難波津(のちには住吉浜)の祭場において、京から天皇の御使が遣わされ、天皇の身体(玉体)の保全を祈る祭祀が行われた。

別表(「八十島祭と大神宝使・仏舎利使発遣一覧」)によると、平安時代の文徳天皇から中世前期の後堀河天皇まで二十二例確認できる。その内の八十島祭空白部分は史料上確認できない事例であるが、安徳天皇のときは源平合戦、仲恭天皇のときは承久の乱により、斎行されなかった例もある。

史料上の初見は、『日本文徳天皇実録』嘉祥三年(八五〇)九月壬午条に、宮主・神琴師・典侍・御巫らを遣し、「摂津国に向かひ、八十島を祭る」とある。この初見の時のみ、大嘗祭の前年にあたる。以後、制度が固まると、大嘗祭の翌年に行われた大神宝使発遣のあと、同年中に行われたが、鎌倉時代になると、数年遅れになっている。

『江家次第』(大江匡房撰)によると、「大嘗会の次の年に之を行なふ、多くは大神宝の後にあり」とある。ちなみに大神宝使は大嘗祭にあわせて、伊勢・宇佐はじめ全国五十神社に宇多天皇のときから遣わされた。さらに伊勢を除く諸社に仏舎利奉献の僧侶の使も遣わされた。摂津国では、大神宝使と仏舎利使の対象神社に、住吉

天皇	即位儀	大嘗祭	大神宝使	八十島祭	仏舎利使
堀 河	応徳3・12・9	寛治1・11・19	寛治2・10・8(後二条師通記)①	寛治2・12・17(中右・師通記)①	寛治3・11・28(中右記)③
鳥 羽	嘉祥2・12・1	天仁1・11・21	天仁2・10・29(殿暦)①	天仁2・11・22(殿暦)①	天永3・6・17(殿暦・中右記)⑤
崇 徳	保安4・2・1	保安4・11・18	天治1・10・15(中右記)①	天治1・12・18(中右記目録)①	大治1・7・18(中右記)③
近 衛	永治1・12・27	康治1・11・15	康治2・11・9(本朝世紀)①	康治2・11・28(本朝・台記)①	天養1・10・23(本朝世紀)②
後白河	久寿2・10・26	久寿2・11・23		保元2・11・11(兵範記)②	
二 条	保元3・12・20	平治1・11・23	永暦1・11・11(山槐記)①	永暦1・12・15(山槐記)①	応保2・6・12(上卿故実)③
六 条	永万1・7・27	仁安1・11・15	仁安2・11・11(兵範記)①	仁安2・12・16(兵範記)①	
高 倉	仁安3・3・20	仁安3・11・22	嘉応1・10・26(兵範記)①	嘉応1・11・25(兵範・愚昧記)①	承安2・2・23(民経記)④
安 徳	治承4・4・22	寿永1・11・24			
後鳥羽	元暦1・7・28	元暦1・11・18	文治3・11・22(玉葉)③	建久2・11・11(百鍊抄・玉葉)⑦	建久3・3・10(百鍊抄・玉葉)⑧
土御門	建久9・3・3	建久9・11・22	正治2・12・25(百鍊抄)②	元久2・8・29(百鍊抄・明月)⑤	建永1・9・26(百鍊抄)⑧
順 徳	承元4・12・28	建暦2・11・13	建保1・11・28(明月記)②	承久2・11・27(百鍊抄)⑨	承久3・3・26(百鍊抄)⑩
仲 恭					
後堀河	承久3・12・1	貞応1・11・23	元仁1・12・27(類聚大補任)②	元仁1・12・12(岡屋関白記)②	寛喜1・8・8(民経記・玉葉)⑦
四 条	貞永1・12・5	嘉禎1・11・20			
後嵯峨	仁治3・3・18	仁治3・11・13			
後深草	寛元4・3・11	寛元4・11・24	建長3・11・21(百鍊抄)⑤		建長5・8・13(百鍊抄)⑦

* 八十島祭が大嘗祭の前年齋行のときは(前)、大嘗祭翌年のときは①、二年後は②、七年後は⑦と記した。

社・大依羅社・生田社・長田社の四社が預かった。

祭祀の次第

○内裏(または里第)の使立

「使立の日、宮主参入、頭もしくは藏人に付し、御麻を献り、一撫一息の後、返し給ふ、内蔵寮の官人参入す、女官、御衣筥おんそのはこを取り之を授け、八足案に居る、即ち女官相具して下向す、…近代或は参内せず、里第より下向す、典侍車・女房車四両、童女車二両、大略、賀茂祭使の如し、淀に於いて船に乗る、車は別の船にあり、公卿以上・殿上人、事縁ある者、皆相共に下向す」

○難波津の次第

「祭日、難波津に到る、宮主、壇を作り(国司、之れを作る)、祭物を置く、女官・内蔵寮官人等、御衣案を以て、宮主の前に立つ、典侍の車、并に出車等、宮主の座の東に列立す、(西面北上)件の座の東に平張ひらばりを立つ、神祇官并に中宮・東宮・内蔵等、属以下の座か、神祇官、御琴を弾く、女官、御衣筥を披げ、之を振る、次に中宮御料、次に春宮御料、宮主、膝突ひざつきに着く、西面、御麻を捧げ、禊を修す、禊了りて祭物を以て海に投ず、次に帰京す、江口に於いて遊女参入す」

○帰京報告

「帰京の後、典侍、参内し御衣を返上す、并に、御祭平安に奉仕畢んぬ由を申す」



宮内庁書陵部所蔵、図書寮文庫、鷹司本「年中行事絵巻」斎院御禊図 (676-14-4)



宮内庁書陵部所蔵、図書寮文庫、鷹司本「年中行事絵巻」鎮魂祭図 (676-6-5)

その一は、斎院御禊図。平安時代初期に置かれた賀茂斎院の賀茂川御禊の場面。初斎院に入るにあたり行われる初度禊と賀茂祭日の前などに行われた（『延喜斎院司式』）。平張の幄舎のなかに斎院が籠り、斎院宮主（卜部）は賀茂川に臨んで祓串を振り、祓禊の所作を行なうところ。この場面は、八十島祭の

の儀式・祭祀が描かれた「年中行事絵巻」がある、八十島祭に類似する別の祭祀場面を紹介したい（鷹司本は江戸時代中期書写）。

祭祀の性格を理解するには、宮主と女官の所作が注目される。使が難波に出発の日、内裏において宮主（卜部）は蔵人をとおして祓串である祓具「御麻」を天皇に奉り、天皇は「一撫一息」ののち返される。難波津の祭場では、宮主は海の方角に西面して「御麻」を捧げ、禊を修める。禊の作法ののち、祭物は海へ投ぜられ帰京した。

右は祭祀の次第がもつとも詳しく記されている『江家次第』巻十五、「八十島祭」（堀河朝、寛治二年（一〇八八）の例か）である。その祭使には内侍司の典侍（多くは御乳母を用う）と神祇史・御琴彈・神部四人・宮主（卜部のなかから選任）・内蔵官人らが従った。

女官の作法は、内裏の案に置かれた御衣篋を持参して祭場に向かい、海に面した難波津に到着すると、女官は御衣を振り、中宮御料・春（東）宮御料の御衣もこれにつづく。このあと祭使典侍は内裏に参内して御衣を返上した。この祭祀の中心は宮主の御禊と女官の御衣振動にある。女官の御衣振動は、天皇身体ごけいの御禊と鎮魂の作法が行われたものであろう。

絵画資料から見た御禊と鎮魂

八十島祭における御禊と御衣の作法に関して、別の絵画資料から考察したい。八十島祭の祭儀の様子を再現する方法として、平安時代末期の京中

天皇「一撫一息」をうけた御麻を用いて、難波津の海面に向けて御禊をする作法に通じている。

その二は、宮中鎮魂祭図。新嘗祭・大嘗祭の前日、宮内省内において行われた鎮魂祭の場面。平安時代後期には『江家次第』によると宮内省内に平張の幄舎を立てて行われた。内侍・女官二人の手には御衣篋が奉持され、一人は天皇の御衣、もう一人は中宮の御衣である。ちなみに東宮鎮魂祭は区別されて、新嘗祭の後に行われているので、東宮御衣は持参されない。鎮魂祭に用いられた御衣は、十二月鎮御魂齋戸祭みたまどはいにしずむるまつりにおいて神祇官齋院わかしむら(西院)の齋戸殿の御座所に納められ、翌年十二月まで鎮められた(『延喜祝詞式』鎮御魂齋戸祭祝詞)。八十島祭の御衣も、内裏に返されたのちは、鎮魂祭と同じく神祇官の齋戸殿に納められたと推測される。八十島祭の御衣は天皇在位中の御魂代みたましろというべきものであろう。

八十島祭において祭場に車が並べられ、女官により御衣が奉持された様子は、鎮魂祭図とも共通するものと思われる。これにより、八十島祭が禊祓と鎮魂の行事であったことが理解できる。

平安前期成立の背景

八十島祭は、承平三年(九三三)六月、「公家、難波に於て八十島解除はらへを修む」(『西宮記』八十島祭事、裏書)とあり、藤原相如すけゆき(長徳元年(九九五)歿)の歌集に「はらへのつかひに難波にゆきて」(『相

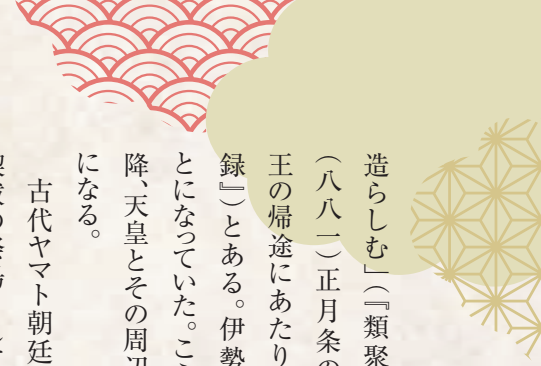
如集』)とあるので、祭祀がはじまった早い時期から、解除・祓という意識が強かった。その成立年代については、史料上の初見が文徳天皇の嘉祥三年(八五〇)からであるので、これ以前には遡れないとする意見がある(田中卓氏説)。

平安初期以降、大嘗祭に先立ち、天皇の御禊がはじまる。大同三年(八〇八)十月、琵琶湖に面した大津に御禊行幸され、以後、中世後期まで、京周辺の河川で行われ賀茂川に固定する。

また、伊勢齋王は齋宮における奉職が終わると、京への帰途、難波津まで赴き、禊祓を受けて帰ることになっていた。その初出は平城天皇讓位により退下された大原内親王の、大同四年(八〇九)六月、齋王帰京にあたり「摂津国をして頓宮を



難波津と住吉神・大依羅神・垂水神・住道神の鎮座地



造らしむ」(『類聚国史』)とある。また、元慶五年(八八二)正月条の太政官符によると、識子内親王の帰途にあたり「難波海に到り解除」(『三代実録』)とある。伊勢から、わざわざ難波まで赴くことになっていた。こうした浄化の作法が平安初期以降、天皇とその周辺において徹底化が図られることになる。

古代ヤマト朝廷において、難波津と難波堀江は、禊祓の祭場として著名であった。仁徳朝に開削されたと伝える難波堀江は、上町台地の北端、淀川・大和川とが合流した河内潟の水流を排水するために開削された堀江で、その大川には船着き場である難波津が設けられた。

ヤマト朝廷の地理的環境において、国土の東には伊勢神宮が鎮まり、東国に向けた出発地とされた。一方、ヤマトの水系の主流となる大和川が難波津に流れ込む地域は、西方、東アジアへの入口であり、「大祓詞」で唱えられる、高山・短山の末より河川へ、さらに大海原に押し流していく詞章は、淀川・大和川などの河川が合流し、難波津に流れてゆく景観に即応している。さらに、難波津南方の住吉津は、禊祓においてお生まれなられた底中表の筒男命三神である住吉大神が祀られてきた聖地である。

欽明朝十三年(五五二)には仏教伝来記事があり、疫病流行により、仏像を難波堀江に投棄した(『日本書紀』、『元興寺縁起』は欽明朝三十一年(五七〇))。また、敏達朝十四年(五八五)にも、仏

像が難波堀江に流されている。ともに疫病流行を鎮めるための禊作法である。さらに、天平勝宝八歳(七五六)三月、聖武太上天皇は身体不予のなか、難波堀江に御幸されている(『続日本紀』)。八十島祭の開始以前から、難波津と堀江は、身体を保全する禊祓の祭場として確定していた。こうした難波霊場への信仰が、八十島祭の祭場にもなっていく。のちに、正暦五年(九九四)六月、疫病流行のため、京の北野船岡で御霊会が催され、御輿二基が難波海に還されたと伝えており、庶民の信仰のなかにも、長く禊祓の霊場という理解があった(『本朝世紀』)。

八十島祭が九世紀中葉に成立した背景には、律令祭祀制から平安祭祀制への移行、天皇に近い内廷機能の拡充があげられる。所功氏は、参考文献に記した『田中卓著作集 神社と祭祀』の「解説」のなかで、拙論(『平安時代の国家と祭祀』)を引いて平安前期の公祭化の展開を指摘された。

天長七年(八三〇)天皇内廷の行事である建礼門前大祓がはじまり、同十年(八三三)律令祭祀制の出雲国造神賀詞奏上儀が最後になり(『続日本後紀』)、殿上方祭祀機能の整備による宇佐使がはじまることなどはその一例であり、天皇代替わりにあたり、玉体の保全・安寧を祈る祭式の成立にあたり、内侍司の典侍はじめ女官、藏人、宮主ら内廷機能が関与する体制は熟成していた。嘉祥三年成立説は妥当な意見であり、八世紀の奈良時代以前には遡りえないであろう。

祭場と祭神

難波津の祭場は、『平記』長暦元年（一〇三七）九月二十五日条によると、「固より祭は祭場をくまかはじり熊河尻に設く、しかるに神司宮人申して云く、例に住吉代家浜に於いてこれを祭ると云々」とあるので、難波津の熊河尻（淀川の河口、田蓑島附近か）から住吉津の海浜に移動したようである。その後も、鎌倉初期には、『新後撰和歌集』（嘉元元年（一一三〇）成立）に、

「後鳥羽院御時、八十島祭によりみ侍ける

津守経国

天の下のどけかるべし難波がた

田蓑の島にみそぎしつれば」

『住吉大神宮年中行事』津守国教撰（東山御文庫・原漢文）には、

「八十島祭、難波河尻の島々に於いてこれを行はせらる、河尻とは淀河の下流なり、河中に島多く、田蓑島・みてしま幣島等の如き皆是れなり、往古河尻の島々、皆住吉これを領す、故に八十島祭、諸神を祭るといへども、住吉大神を宗とす」

とあるので、熊河尻が使用されたほか、住吉浜の事例も伝えられている。

難波の田蓑島は田中卓氏が指摘するように、

『住吉大社神代記』に記された「九月 御解除、田蓑島姫神社」の鎮座地と関係していた住吉社神領域にある。

承平三年（九三三）の八十島祭では、典侍ら祭使が住吉社に就いて舞神子四人と「解祭」が行われ、その様は「神宴」のようであったという。解斎と直会は住吉社の差配で行われた。これに内侍・藏人は参加がなく、「住吉社古老申詞」によるという（『西宮記』八十島祭事、裏書）。住吉社との関係は深く、『延喜臨時祭式』八十島神祭条によると、八十島祭にあわせて、摂津国の神々、住吉神四座・大依羅神四座・海神二座（『延喜神名式』「大海神社二座」、現在、住吉大社の摂社）・垂水神二座・住道神二座に幣帛が班布され、住吉社神主と各社の祝に賜祿があつた。

祭使である内侍司の典侍はじめ女官、天皇身体みみの御祓と御卜に従事した宮主（卜部）が祭祀の主要な所作を務めたほか、『延喜臨時祭式』によると、神祇官斎院に仕える御巫・生島巫が加わることも重要である。

神祇官斎院には、御巫祭神八座のほか、坐摩巫祭神五座、生島巫祭神二座（生島神・足島神）などが祀られてきた。忌部氏の『古語拾遺』によれば、

「生島 これ大八洲の霊なり、今生島の巫の斎ひ奉れるなり」

「坐摩（あかすり）これ大宮地の霊なり、今坐摩の巫の斎ひ奉れるなり」

とある。生島巫・坐摩巫が祀る神々は、孝徳朝難波宮の地域に由来している（『延喜四時祭式』相嘗祭条「難波大社」Ⅱ『延喜神名式』撰津国「難波坐生国咲国魂神社二座」と「坐摩神社」）。とくに生島・足島神は、難波津に広がる島々の「大八洲の霊」が鎮まっていた。

「大八洲の霊」の神々に対しては、毎年の神祇官祈年祭において、生島巫により祀られ、その祝詞が遺されている。『延喜祝詞式』の祈年祭祝詞には、

「生島の御巫の辞竟^{こと}へ奉る皇神たちの前に白さく、生国・足国と御名は白して、辞竟へ奉らくは、皇神の敷き坐す島の八十島は、谷蟻^{たにく}のさ渡る極み、塩沫^{しほなわ}の留まる限り、狭き国は広く、峻^{さか}しき国は平らけく、島の八十島墮つる事無く、皇神たちの依とし奉るが故に、皇御孫命の宇豆の幣帛を称へ辞竟へ奉らくと宣りたまふ、」

現代文訳Ⅱ（「生島の御巫が御祭り申し上げます尊い神々の前に申し上げます、生国の神・足国の神と御名を申し上げて、称え事を申し上げますことは、神様の治められておられる多くの島々は、谷の蛙が跳ねわたる地の果てまで、海水の泡が流れて留まる海の果てまで、狭い国は広く、険しい国は平らかであるように、多くの島々は、落ちることなく、神様たちが皇御孫命（天皇）にご委託なさいま

すがゆえに、尊い供え物を捧げて御祭り申し上げますと宣り聞かせます」

とある。祈年祭の祝詞文は、難波津の島々に縁りをもつ「島の八十島」に鎮まる神霊に源流をもち、八十島祭も難波津と、のちには住吉浜の先を望んで、島々に鎮まる神々に向けて祭祀が行われた。

法橋顕昭『袖中抄』（鎌倉初期・文治年間成立）には、

「やそしま

代始にぞ、やそ島のつかひとて、内の御めのものたちて、やそしまめぐりといふ事は侍る、それも島々にてはらへすべきを、住吉の浜のこなたにて、西の海にむかひて、もろもろの島じまの神をまつるといへり」

とある記事は、そのことをよく示している。祭祀の最後には、壇上に供えられた祭物が海中に向けて投供された。『延喜臨時祭式』八十島神祭条によると、その祭料のなかには、「^{あらたへのみそ}鹿御服八具料、庸布八段」をはじめ織物類など、八・八十の数が多くみられるので、これらが投ぜられたものであろう。

外来魂と内在魂

先に記した嘉祥三年（八五〇）成立説に対して、五世紀からはじまる国生み神話に基づいた王権祭祀という見方もある（岡田精司氏説）。八十島祭は

大八洲の霊である外来魂を招く呪術的祭儀であったという理解である。これには鎮魂祭もまた、外来魂・遊離魂の招魂儀であるという共通理解に基づいているが、これらは折口信夫が大嘗祭において、天皇の身体は「天皇霊」を入れる容器であるという見解が根底にある（「大嘗祭の本義」）。また、折口は外来魂と内在魂との交換・交替を信じていた（「小栗外伝」）。「天皇霊」とは、天皇に備わった内在魂であろう。天皇の祭祀は、外来魂の入魂というよりは、天皇の内在魂を神事によって活性化させるということである。天皇に付随した中宮・東宮の祭儀もまた、内在魂の増殖を祈る儀礼といえよう。恩頼・ミタノフユは、そうした威力・加護を表現した言葉といえる。天皇鎮魂祭は、外来魂享受の作法ではなく、天皇身体の活性と保安の祈りであった。

田中卓氏は岡田精司氏との、長年の八十島祭論争のなかで、岡田氏の鎮魂説など、一部の説を取り入れ、その最終の論考において結論づけられた見解は、「天皇が使を難波津に参向せしめて、その昔のイザナギ・イザナミの尊の国生みを偲ばれ、八十島の神霊を仰いで国土の恢弘を祈請せられるとともに、主としては鎮魂と禊祓の儀礼を修せられて、御自ら及び皇族の宝寿の長久を祈られたものであらう」（田中氏著書、平成六年）と述べられた。現在における研究の成果といえよう。

さらに言えば、天皇代替わりにおいて、御代一代の天皇身体の保全を祈ることは、国家・国民の安泰・安寧に通じることであった。天皇祭祀と地域の祭

祀とは、災異に対応した神々と天皇・国民との「循環型祭祀体系」が機能していたが、八十島祭もこの体系の一環に位置している。

本稿では、その祭祀の性格について、再考と補説を試みた次第である。

（國學院大學名誉教授）

参考文献

- ・折口信夫『折口信夫全集』第二・第三巻、中央公論社、昭和三十年
- ・田中 卓「八十島祭の研究」『田中卓著作集 神社と祭祀』国書刊行会、平成六年、初出昭和三十一年
- ・岡田精司「即位儀礼としての八十島祭」『古代王権の祭祀と神話』塙書房、昭和四十五年、初出昭和三十三年
- ・田中 卓「再び八十島祭について」『田中卓著作集 神社と祭祀』国書刊行会、平成六年、初出昭和五十二年
- ・若井敏明「八十島祭の再検討」『日本宗教文化史研究』四二二、平成十二年
- ・小林宣彦「八十島祭」『事典 古代の祭祀と年中行事』吉川弘文館、平成三十一年
- ・塩川哲朗「鎮魂祭」『事典 古代の祭祀と年中行事』吉川弘文館、平成三十一年
- ・塩川哲朗「鎮魂祭の成立と大嘗祭」『國學院大學研究開発推進機構紀要』十二、令和二年

大阪市農業フェアと住吉大社奉納式



大阪市農業フェア（大阪市農業フェア開催委員会）では、農作物品評会の一環で住吉大社賞の贈呈および住吉大社奉納式を行っています。

同フェアは、都市農業に対する市民の理解を深め、都市と農業の共存をはかることを目的に毎年十一月に開催されます。大阪市内農業の一大イベントとして、大阪市農作物品評会と出品農作物の即売、伝統野菜・大阪産野菜・花き類の販売、模擬店やバザーが催され、毎年多くの人々で賑わっています。なかでも、フェア中の大阪市農作物品評会において、農作物の最優秀者には「大阪市長賞」および副賞「住吉大社賞」（木彫神鬼）各五点が授与され、その後、受賞者および関係者によって、住吉大社において受賞農作物の奉納式（住吉大社奉納セレモニー）があります。

農業フェアの「住吉大社賞」と「農作物奉納式」は、いうまでもなく住吉大社に起源を有するものです。住吉大社と農業の関係は長い歴史と伝統で結ばれていますが、例年の御田植神事（重要無形民俗文化財）では、地元農家の有志による奉仕団体「御田講」の皆様が活躍され、昔も今もかわらず農業関係者の崇敬をひろく集めています。

そもそも、大阪市内の農業団体は各地区で活動をしていました。戦後しばらくして、住吉区農業団体協議会が、各農家の技術向上、情報交換、生産性向上などを目的に、農業奨励の品評会を企画

しました。その時、御田植神事を介して農家に親しまれる住吉大社に構想を持ち掛けたところ、当時の宮司・高松忠清たかまつただきよがその趣旨に賛同したため、昭和四十二年（一九六七）、住吉大社の境内を会場にして初めての住吉区農作物品評会（住吉区農業団体協議会主催）が実現しました。以降、恒例の催事となり、昭和四十九年（一九七四）住吉区と住之江区が分割された後も、両区の農業団体が合同で開催されました。

昭和五十三年（一九七八）四月一日、市内各地の農業団体を大合併して大阪市農業協同組合（JA大阪市）が成立。この当時、初代組合長理事の道庭富太郎氏どうにわとみたろう（大阪府農業会議会長）の提案によって、従来の住吉区・住之江区の両農業団体協議会による品評会の伝統をもとに、昭和五十三年（一九七八）、市内全域を対象とする大阪市農作物品評会が大々的に開催となりました。同時に従来の「住吉大社賞」も品評会の優秀賞として引き継がれ（参加者の拡大を受けて住吉大社賞は五点

に増加）、住吉大社への農作物奉納式も受け継がれたのです。その背景には、前身の住吉区・住之江区の品評会が基盤となったこともあります。やはり御田植神事の伝統を敬慕したことも大きな理由となりました。

大阪市農作物品評会へと発展するなか、品評会に合わせて即売会も催され、市内各地を会場にするようになりました。ちなみに、昭和五十六年（一九八一）、同六十三年（一九八八）にも住吉大社が会場になっています。

昭和六十三年（一九八八）、大阪市農作物品評会の優秀賞として「大阪市長賞」が新設されました。そのため、従来の「住吉大社賞」は副賞に位置づけられました。つづいて、大阪市経済局長賞、大阪市農業協同組合長賞、特別賞（大阪府知事賞・大阪府農業協同組合中央会長賞・大阪府花き園芸連合会長賞）が増設され、品評会の選考も多彩になってゆきました。

平成四年（一九九二）十一月二十一日、初めて





以上の経緯により、現在も農業フェア・農作物品評会において「住吉大社賞」が大阪市長賞の副賞として併せて贈呈されています。同じく、授賞式の後、受賞者および役員関係者が住吉大社に参拝、受賞農作物の一部を供える奉納式（住吉大社奉納セレモニー）を行うことが伝統となっているのです。

の「大阪市農業フェア」が開始されました（平野区加美グラウンド）。主催は、大阪市・大阪市農業団体協議会・大阪市農業協同組合・大阪市畜産協議会・大阪市花き園芸推進協議会によるもので、新しい時代における都市と農業の共生をめざすため、以前までの農作物品評会・即売会を受け継ぎつつ、市民参加型の大規模イベントとして催行に至りました。その後、大阪市後援のもと大阪市農業協同組合（JA大阪市）が主体となり、開催委員会を設置して毎年の開催を行っています。

崇敬講社紹介

住吉大社 御田講 おんだこう

住吉大社を代表する崇敬講社です。主な講員は、住吉・住之江のJA（農協）関係者を中心に構成されます。御田植神事では奉耕者となり、御田刈之儀と宝之市神事では初穂奉献などの神事にご奉仕いただき、一年を通して御田の育成にご尽力いただいております。収穫した神米は年間の諸祭典でお供えされ、また、その初穂を撰米して宮中に献穀いたしております。

明治以後、大阪市や旧東成郡・西成郡の各農会、農業実行組合、農業会によって御田が維持さ

れてきましたが、種貸講奉耕者を母体として、昭和三十一年六月十四日に住吉大社御田講が結成されました（初代講元は白柳菊太郎氏）。

農業神としての住吉大神は、耕作のために灌漑を教示された説話（『住吉大社神代記』）、苗代の作成方法を指導された説話（『播磨国風土記』）などが伝えられます。当社鎮座の時に御田を定められて以来、現在まで続く御田植神事の伝統によって、古くから近在の農家の崇敬を集めています。

御田講 講元 山本英夫



夏越女保存会 なごしめ

住吉祭の夏越祓神事（大阪府無形民俗文化財記録選掲）に参加する夏越女・稚児・金棒・若侍・囃子など、その奉仕役を維持継承することを目的に、昭和五十七年六月に保存会が結成され、現在まで活動をつづけています。

当初は旧住吉新地の関係者が中心でしたが、現在は住之江区御崎地区を中心にした有志で、神事奉仕者の募集、装束の着付けなどのお世話をご奉仕しています。



岸の姫松講 きし ひめまつ

松苗神事（四月三日）の神事継承を目的に掲げて平成八年に発足。大阪市内の木材業種を中心に結成された講社です。

松苗神事は俳句の献詠とともに松苗の献木を行なっていますが、この伝統を守り、後世に伝えてゆくため、地元の木材商を中心にした有志が集まり、毎年の神事に参列、神事後に総会を開催して親睦を深めています。



会長 長田淳子

講元 櫻坂修平

いちえびすだいこく 市戎大國講

住吉のえべっさん、市戎社・大国社を崇敬し、
商売繁昌・家内安全を祈願する市戎大國祭（正月
九日、十日）に奉仕する講社。昭和二十七年一月
二十二日結成。正月の三が日の祈祷木授与所、宵
戎・本戎の祭礼奉仕、年一度の参拝旅行などの活
動を行なっています。

講元 北正彰

ともやっこ 大阪供奴保存会

伝統ある奴振りを保存継承するため昭和二十三
年に結成されました。供奴とは大名家の参勤交代
や江戸登城の日雇奴に由来するもので、今日でも
神事で伝統的習俗を伝える貴重な存在になってい
ます。住吉大社でも、古くより御田植神事の列
次、住吉祭の渡御列にも奉仕しています。

会長 阿部清孝



社務日誌抄

(令和元年二月から令和二年四月分まで)

令和元年

一二月

一日 朔日祭、平林地区参列。

二日 卯之日祭。大阪モンゴル秋まつり 岡 宮寄権禰宜参加。ロシア連邦サンクトペテルブルク第八三番高等学校参拝。宮司以下参籠。

三日 明治祭。初辰祭。神社スカウト協議会 坂野権禰宜出席。

四日 三重県四日市市天ヶ須賀住吉神社 宮司 分部憲一氏以下一六名参拝。大阪城エッゲンベルク城友好城郭提携十周年記念行事 オーストリア共和国 シュタイアーマルク州立博物館ヨアネウム館長 ヴォルガング・ムヒツチエ氏以下現地視察。

六日 大阪府神社庁関係者大会 富澤権宮司出席。

七日 五社秋季例祭。特別展「流転一〇〇年 佐竹本三十六歌仙絵と王朝の美」宮司 神武権宮司観覧(京都国立博物館) 小出権禰宜随員。東粉浜地域座談会 岡権禰宜出席。粉浜学園七五三参拝。大阪市立真住中学校三名・阪南中学校四名・住吉中学校五名職場体験学習(翌日迄)。

八日 壇使 坂野 庄司権禰宜奉仕。宮中献穀用御箱奉納式(株)金剛組代表取締役社長 刀根健一氏奉納。大阪府玩具人形問屋協同組合連合会 会長 富山幹太郎氏・大阪玩具人形住吉講 講元 熊本和浩氏以下三一名参拝。同総会 神武権宮司・中川権禰宜出席。週刊「女性自身」誌特集記事撮影 三林子氏来社。

九日 天皇陛下御即位をお祝いする国民祭典 神武権宮司参列(皇居前広場)。大阪市教育委員会文化財保護課「大阪の歴史再発見」現地見学会 高階権禰宜講師。大阪帝塚山ロータリークラブ 四恩学園七五三詣・境内清掃奉仕。

一〇日 市戎大国社月次祭。装道礼法きもの学院 七五三詣着付直し奉仕。境内交通整理 BS 一二三団奉仕。

一二日 臨時大祓式。南海電気鉄道(株)広報部 片岡愛之助氏 宮司対談。大阪市立友渕中学校校外学習。神道青年会部会議 名村 滝沢権禰宜出席。雑誌

「BUBKA」NMB48 太田夢莉氏 境内撮影。関西テレビ番組「フォトぶら」 蛭原徹氏 馬場園 梓氏 濱田マリ氏 ダイアン 境内収録。

一三日 大海神社月次祭。本殿清掃。特殊神饌調製。次年度二期神楽女採用試験。宮司以下参籠。

一四日 大嘗祭当日祭 宮司以下奉仕(大祭式)、責任役員 太田重彦氏以下常任総代 崇敬講社 奉仕団体 来賓等一五〇名参列。四本宮御紋章入神前幕奉納(一般財団法人住吉村常盤会・南海電気鉄道株式会社・株式会社シマノ・雪本泰永氏)、種貸社・児安社・海士子社神前幕奉納(大阪シティ信用金庫)。御神酒講 酒樽奉納。

十五日祭・七五三祝祭。

一六日 御大典奉祝蹴鞠奉納式 蹴鞠保存会 理事長 上田恒弘氏以下八名奉仕・(株)セレッソ大阪 代表取締役社長 森島寛晃氏 参加奉仕。大阪市農業フェア開催委員会参拝・住吉大社賞贈呈。住吉村常盤会村内安全祈願祭。兵庫県加西市住吉神社笠屋区奥丁参拝。御祓講獅子 東粉浜まつり参加 万力権禰宜 西角神人出演。関西日本サイ科学研究集会 小出権禰宜講師。

一八日 十八日会 当社開催。生田神社・大神神社・檀原神宮・賀茂御祖神社・北野天満宮・多賀大社・長田神社・西宮神社・伏見稻荷大社・平安神宮・湊川神社 各宮司参拝。國學院大學 准教授 藤本頼生氏・同助教 高野裕基氏 宮司面談。神社庁第九支部大暦頒布始奉告祭。

一九日 宮中献穀、明治神宮・靖國神社各献穀 宮司 岡水野権禰宜・御田講 吉田美智雄氏 椋本壽夫氏 石田貴芳氏・(株)金剛組代表取締役社長 刀根健一氏同行(翌日迄)。

二〇日 海上交通安全祈願祭。愛知県豊橋市 白山比咩神社 宮司 田中善規氏以下総代会参拝。BS 一二三団四名参拝。神宝刀銘「小野繁慶」(重要文化財) デアゴステイニーニ社「週刊日本刀」撮影。天皇陛下御即位奉祝御堂筋提灯行列 富澤権宮司 坂野中

野名村宮寄 進藤渡會權禰宜 西角神人・住吉踊保存後援会八〇名・BS一二三団四名・御祓講獅子三六名参加。

二二日 神稜講秋季例会 宮司参会（滋賀県近江八幡市日牟禮八幡宮参拝）岡權禰宜随行。源泉所得税年末調整説明会 中野權禰宜 田岡主事補参加（住吉区民センター）。

二二日 大阪木材商住吉講 講長 橋本博明氏以下一三名参拝。東京マックス美容専門学校参拝。初詣警備会議。BS行事委員会 福山權禰宜出席。

二三日 土木学会関西支部FCCフォーラム 小出權禰宜講師。

二四日 島津義弘公没後四百年祭 神武權宮司参列（鹿児島県始良市精矛神社）逸見權禰宜随行。にんやか田邊「神馬ウォーク」参拝。歌劇「大和はじまりものがたり」宮司觀覽（大神神社三輪山会館）庄司權禰宜随行。

二五日 立正佼成会 大阪教会長 松本貢一氏参拝。以和貴会演奏会「欣求浄土天台聲明と天王寺楽所」宮司觀覽（フェスティバルホール）庄司權禰宜随行。インバウンド観光促進セミナー 岡權禰宜参加（堺市役所）。住吉大社セミナー「描かれた神功皇后」細見美術館 主任学芸員 福井麻純氏講演。

二七日 熱田神宮学院生徒三名参拝。住吉隣保事業推進センターかなえ講座 小出權禰宜講師。

二八日 浅沢社月次祭。十日会 宮司出席（四条畷神社）庄司權禰宜随行。大阪労働局労働保険適用事務組合課 労働保険料等算定基礎調査 中野權禰宜対応。神社庁第一支部大麻暦頒布始奉告祭 富澤權宮司参列。大阪市立清江小学校はぐくみ事業 岡權禰宜講師。すみよし反橋能実行委員会 小出權禰宜出席。

二九日 住吉警察署 歳末特別警戒部隊発隊式 神武權宮司 岡權禰宜参列。住吉警察署協議会 岡權禰宜出席。

三〇日 毎日放送「日本のまつり」取材。

一二月

一日 朔日祭 墨江地区参列。辞令・權禰宜 名村文吾、

港住吉神社勤務を命ずる。
二日 大嘗宮拝観 富澤權宮司以下職員研修出張（第一班）。

三日 北海道小樽市住吉神社 宮司 星野昭雄氏参拝。サンフランシスコ・アジア美術館所蔵「住吉祭祀図屏風」特別觀覽会 小出權禰宜参観。神道青年会行事 名村權禰宜参加。

四日 大嘗宮拝観 神武權宮司以下職員研修出張（第二班）。住吉村常盤会定例旅行 小出權禰宜参加。

五日 全国国宝重要文化財所有者連盟総会 宮司出席（東京都日枝神社）高階權禰宜随行（翌日迄）。四天王寺樟蔭忌雅楽 東野囀託奉奏。住吉踊保存後援会支部長会 神武權宮司 中野 進藤 渡會權禰宜 西角神人出席。神社庁第九支部役員会 日下 福山權禰宜出席。

六日 大嘗宮拝観 岡田禰宜以下職員研修出張（第三班）。大阪国学院二回生後期スクーリング 万力 岡權禰宜講師（翌日迄）。異神社敬神婦人会神徳講演会 小出權禰宜講師。薩摩琵琶「島津義秀の世界」演奏会 逸見權禰宜参観。御田講年末懇親会 宮司 高階 滝沢權禰宜出席。

七日 御神酒講正月献備打合会 神武權宮司 庄司 水野權禰宜出席。館友会大阪府支部年末懇親会 逸見 滝沢 中川權禰宜出席。

八日 卯之日祭、清水丘地区参列。東京都青梅住吉神社 本町区木頭 榎戸栄二氏以下参拝。吉祥殿ブライダルフェア。

九日 初辰祭。大阪府婦人神職の会設立四十周年奉告祭 東野囀託伶人奉仕。神道青年会年末懇親会 名村 山下 宮寄 滝沢 日下 福山權禰宜 西角神人出席。

一〇日 市戎大国社月次祭。十日会 宮司出席 当社例会、生國魂神社・四條畷神社・枚岡神社・水無瀬神宮・大鳥大社・坐摩神社 各宮司参拝。宿院頓宮常任総代会 富澤權宮司出席。

一二日 茶道稽古（八木宗敏社中）。皇學館大学共通科目 小出權禰宜講師。

一三日 大阪市立大和川中学校五名 職場体験学習。

行。水都会役員会 万力権禰宜出席。港住吉神社氏子総代会 宮司 神武権宮司 岡田禰宜 名村権禰宜出席。

一四日 正月奉仕者事前説明会。みなと浪曲寄席 神武権宮司 岡田禰宜 名村権禰宜参観。安立神輿会忘年会 万力日下権禰宜 西角神人出席。

一五日 祭。帝塚山派文学学会研究会 小出権禰宜出席。社報『住吉っさん』第三二号発行。

一六日 NTTドコモラグビー部レッドハリケーンズ参拝。アイコム(株)取締役総務部長 小路山憲一氏以下無線機奉納奉告祭。浪速学院理事会評議員会 神武権宮司出席。すみよし反橋能実行委員会 小出権禰宜出席。

一八日 十八日会 宮司出席(湊川神社) 逸見権禰宜随行。埼玉県さいたま市岩槻区仲町住吉神社 世話役代表 眞中昭夫氏参拝。住吉公園百五十年事業会議 小出権禰宜出席。神道青年会理事会 名村権禰宜出席。

一九日 大阪・関西万博大阪事務局 逸見 岡権禰宜訪問。BS 地区行事委員会 日下権禰宜出席。

二〇日 海上交通安全祈願祭。磐船神社 宮司 西角明彦氏 宮司面談。豊昇龍昇進祝賀会 宮司 神武 富澤権宮司出席。神馬白雪号 帰社奉仕(正月七日迄)。

二二日 禊行事。BS一二三団発団記念参拝。同団訓練費徴収 福山権禰宜出席。

二三日 国際宗教同志会 富澤権宮司出席。

二六日 煤払式。歳末自衛消防訓練 神武権宮司以下全職員実施。年末一斉清掃。正月準備作業公開 NHK 読売新聞朝日放送 大阪日日新聞 奈良新聞 各取材。

二八日 浅沢社月次祭。次年度神職採用予定者三名・皇學館大学生八名 神務実習(正月六日迄)。

三一日 師走大祓式。除夜祭。宮司以下神職参籠。年越。

令和二年

一月

一日 若水の儀。元旦祭・初卯祭。初詣(※正月三日が日参拝約二三四万人)。住吉大社芳志会・市戎大國講・

ボーイスカウト大阪第二二三団ほか奉仕。神賑行事 住吉踊保存後援会・御祓講獅子(二日迄)。りそな銀行 境内清掃奉仕。

二日 琴古流美風会 尺八奉納演奏。

三日 元始祭。神賑行事 江戸芸かっぱ奉納。りそな銀行会長 東和浩氏 清掃奉仕十年感謝状贈呈。

四日 踏歌神事、福の餅まき。

五日 故松本全夫氏通夜祭 宮司参列。

六日 年末年始関係者御礼 神武権宮司 岡権禰宜回礼。

七日 白馬神事・昭和天皇陵遙拝式、神馬白雪号 杉谷昌保氏 川上拓生氏奉仕、神馬講 講元 河村博史氏以下講員参列。新年献詠祭短歌選者会 佐沢邦子氏 香川ヒサ氏選考。神稜講新年参拝。御神酒講新年参拝。読売新聞 大阪日日新聞取材。

八日 裏千家今日庵初釜式 宮司参列。

九日 市戎大國社宵宮祭(宵えびす)、市戎大國講 講元 北正彰氏・夏越女保存会 会長 長田淳子氏・住吉御崎講 講元 友澤洋一氏・住吉踊保存後援会 会長 長谷川八重子氏・住吉御田講 講元 山本英夫氏・

なにわの手打ち保存会 会長 賀集啓次氏・(株)新魚栄代表取締役 網干貴之氏・福娘各五名等各講員奉仕(翌日迄)。

一〇日 市戎大國社例祭(本えびす)、前日同断。みずほ銀行 住吉支店鏡開き(神像奉斎)。

一一日 天機奉伺 宮中参内、秋篠宮邸 新年御機嫌伺、明治神宮新年参拝、宮司参向 逸見権禰宜随行。港

住吉神社新年祭。東粉浜新年互礼会 富澤権宮司 庄司 滝沢権禰宜出席。BS一二三団会議 日下 福山中川権禰宜出席。

一二日 若宮八幡宮例祭(湯立神事)、宮原幸夫氏以下神樂奉仕。表千家不審庵初釜式 神武権宮司参列。

一三日 御結鎮神事、奉射神事弓十番(住吉大社御結鎮祭大的式) 大阪府弓道連盟 会長 中野英夫氏以下会員奉仕。宿院頓宮新年祭。大海神社月次祭。

一四日 初辰まいり(二の辰)。

一五日 祭・新年献詠祭(産経新聞社後援・末廣堂協賛)、産経新聞社大阪本社 西出陽輝氏・入選者各参列。選者 佐沢邦子氏披露奉仕。天位「百年は使えますよと勧められ古稀の記念に若狭塗箸」

三二日 社頭受付等マスク着用開始。

二月

米谷茂氏、地位「しんしんと雪降る中を一人来て
無人の生家に松飾りする」藤林正則氏、人位「初
夢は凍てつくソ満国境の越年歩哨に佇つ父の眉」
藤本久佳氏。古札焼納式（とんど）。住吉村常盤
会新年互礼会 小出権禰宜出席。

一六日 住吉自衛消防協議会 高階権禰宜出席。

一七日 香川県北三豊五社合同参拝団 吉田成隆氏以下
一八八名参拝。

一八日 読売新聞わいず倶楽部クリン隊清掃奉仕。泉谷
家通夜式 宮司 富澤権宮司参列。

二〇日 海上交通安全祈願祭：大阪船主会海上安全祈願祭、
大阪船主会 会長 高橋静夫氏・近畿海事広報協会
会長 袋本浩氏・近畿運輸局 局長 八木一夫氏・大
阪海上保安監部 監部長 早川知樹氏・以下四七名
参列。

二二日 神宮 宮司新年参拝 逸見権禰宜随行。

二三日 住吉区長 平澤宏子氏来社 就任挨拶。大阪市立墨
江丘中学校五名 職場体験学習（翌日迄）。住吉公
園百五十年事業会議 小出権禰宜出席。十日会新
年会 宮司 神武 富澤権宮司 坂野 逸見権禰宜 西角
神人出席。

二四日 熱田神宮 宮司新年参拝 逸見権禰宜随行。

二五日 大阪教育大学アメリカンフットボール部参拝。

二六日 住吉踊保存後援会支部長幹事会 神武権宮司 宮崎
進藤 渡會権禰宜 西角神人出席。神道青年会理事
会 名村 滝沢権禰宜出席。すみよし反橋能実行委
員会 小出権禰宜出席。

二七日 今主社例祭。プロ野球球団オリックス・バファロー
ズ参拝。国旗掲揚推進御堂筋パレード 万力 名村
宮崎 滝沢権禰宜参加。水都会 万力権禰宜出席。
読売新聞「すみよしさん冬」連載（三十一日迄）。

二八日 浅沢社月次祭。住吉大社・大阪市消防局 合同消
防訓練 宮司以下全職員実施 消防局職員 自衛消防
隊協力、一日消防署長 俳優 松下洸平氏。芳志会
解散式（昭和四一年結成）。

二九日 茶道表千家久田家半床庵初釜式 宮司参列。

三〇日 館友会大阪府支部会 神武権宮司 逸見 武田 滝沢
中川権禰宜出席。帝塚山街づくり交流会 小出権
禰宜出席。

一日 朔日祭。立聞社例祭。海士子社例祭。照国神社参
拝・北前船寄港地フォーラム鹿児島 宮司 神武権
宮司出席 小出権禰宜随行（翌日迄）。

三日 節分祭。厄除振舞善哉。奉納追儼歩射式、弓馬術
礼法小笠原教場三一世宗家 小笠原清忠氏以下近
畿菱友会奉仕。斎館修理工事祈願祭。港住吉神社
節分火祭。

四日 国際宗教同志会 富澤権宮司出席。大阪・関西万
博陳情 逸見 岡権禰宜訪問。

六日 卯之日祭。FMラジオ札幌しろいし局制作「チエ
ンバリスト明楽みゆきの浪漫紀行」北前船企画
宮司電話出演。大阪府神社庁役員会 富澤権宮司
出席。

七日 初辰祭。河村正雄氏叙勲祝賀会 宮司参列。全国
城郭管理者協議会見学会 小出権禰宜案内。大阪
市立住吉中学校七名訪問学習。TBSテレビ番組
「王様のブランチ」ミルクボーイ 境内収録。

八日 すみよし歴史案内人の会 小出権禰宜講師。

九日 吉祥殿ブライダルフェア。

一〇日 市戎大国社月次祭。宮司以下参籠。

一一日 紀元祭・橿原神宮遥拜式。内閣府特命担当大臣
竹本直一氏来社 宮司面談。霊友会第八支部参拝。
モラロジー研究所近畿地区参拝。

一二日 茶道稽古始 八木宗敏社中奉仕。リコーSDGs
セミナー 岡権禰宜受講。日本相撲協会大阪場所
御免祝会 河野 滝沢権禰宜出席。靖国神社 権宮司
故坂明夫氏通夜祭 神武権宮司参列。

一三日 大海神社月次祭。初詣警備総括会議 宮司以下出
席。靖国神社 権宮司 故坂明夫氏告別式 神武権宮
司参列。院友会大阪府支部役員会 庄司権禰宜出
席。南都銀行堺支店 NANTO 堺交流会 小出権
禰宜講師。

一四日 御田講 事務局発足会議 高階権禰宜出席。松原市
遺族会参拝。

一五日 十五日祭。大阪府立安立小学校創立百十周年記念

三月

式典 宮司参列 逸見権禰宜随行。同記念祝賀会講演 小出権禰宜講師。

一六日 住吉武道館武道祭 富澤権宮司参列。神社スカウト協議会神道章講習会 坂野 山下権禰宜講師。

一七日 住吉大社セミナー能「鵜飼」説明付公演（共催「すみよし反橋能」会長 氏田耕吉氏）観世流能楽師 山中雅志氏講師、住吉区長 平澤宏子氏・住之江区長 西原昇氏 来賓挨拶。日本相撲協会立浪部屋 寄宿（四月三〇日迄）。

一八日 十八日会 宮司出席（賀茂御祖神社）庄司権禰宜随行。

二〇日 海上交通安全祈願祭。土俵祭降神之儀。奈良県北葛城郡王寺町久度神社宮司 森村光延氏以下三十五名参拝。衛士・社務員・観境士参拝旅行（徳島県切幡寺他）第一班 倉智権禰宜 西角神人引率（翌日迄）。

二一日 南海稻荷社初午祭 宮司奉仕。神社庁第九支部初会研修旅行（兵庫県南あわじ市おのころ島神社参拝等）日下 福山権禰宜参加。

二二日 清風南海高等学校卒業奉告祭。献詠俳句選者 藤井富美子氏退任・楠本義雄氏就任奉告祭。大阪市立住之江会館講座 小出権禰宜講師。BS 一二三 団発団五十周年記念事業会議 日下権禰宜出席。宮司以下参籠。

二三日 天長祭。住吉祭神輿渡御実行委員会 宮司以下出席。

二四日 住吉大社名誉宮司 敷田年博大人命十年祭。兵庫県三木市志染町広野住吉神社総代会 大西昭三氏以下八名参拝。四本宮幣殿及摂末社の鈴の緒・おいとしぼし杜重軽石・手水舎柄杓を一時撤去、撫でうさぎ封鎖。

二六日 衛士・社務員・観境士参拝旅行第二班引率 滝沢福山権禰宜出張（翌日迄）。NHK大阪放送局取材。

二八日 浅沢社月次祭。

二九日 日本相撲協会 手数入奉納式の中止（疫病拡大の防止対策）。

一日 朔日祭・卯之日祭・疫病流行鎮静祈願祭。御祓講 獅子反省会 万力 渡會権禰宜出席。

二日 初辰祭（疫病拡大の防止対策 祈祷受付対応）。衆議院議員 佐藤茂樹氏来社。KBS京都テレビ番組「こりやくさん」境内撮影。

三日 出雲大神宮 宮司 岩田昌憲氏参拝。津守神社宮司 今江隆道氏・北海道神宮 権禰宜 吉田光臣氏参拝。山茶花社 家元 西島真森氏参拝。御神酒講打合会 庄司権禰宜出席。

五日 侍者社例祭。塙使 万力 武田権禰宜奉仕（奈良県橿原市 雲名梯川俣神社・畝火山口神社）。日本相撲協会立浪部屋参拝。

六日 責任役員会・常任総代会（書面決議）。

七日 故矢田忠氏邸 逸見 庄司権禰宜弔問。

九日 十日会 宮司出席（枚岡神社）逸見権禰宜随行。

一〇日 市戎大国社月次祭。住吉公園百五十年事業会議 小出権禰宜出席。

茶道稽古。

二一日 大海神社月次祭。

二三日 花神輿打合会議 万力権禰宜出席（安立福祉会館）。

一四日 十五日祭・疫病流行鎮静祈願祭、刈田地区参列。

一五日 本殿清掃。特殊神饌調製。宮司以下参籠。住吉大社セミナー延期。

一六日 社セミナー延期。

一七日 祈年祭・神種頒賜祭・疫病流行鎮静祈願祭、三世

桐竹勘十郎氏 吉田襄太郎氏 桐竹勘助氏 文楽「寿三番叟」奉納。責任役員 太田重彦氏以下総代・御田講 講元 山本英夫氏以下同講員・J A 大阪市

代表理事組合長 菱井由一氏・同住吉支店長 山本良治氏・同住之江支店長 天野良信子氏・住吉名勝保存会 理事長 高野伸生氏・住吉踊保存後援会 会長 長谷川八重子氏等八〇名参列（直会等中止）。テレビ大阪取材。

一九日 献詠俳句選者会 古賀しづれ氏 大橋咲氏 森田純一郎氏 小杉伸一路氏 楠本義雄氏選考。

二〇日 皇靈殿遥拝式。海上交通安全祈願祭・疫病流行鎮

静祈願祭。招魂社春季例祭（直会等中止）。神馬塚 宮司 高階権禰宜参拝。千度講 安立連合町会・

安立四丁目北町会・安立二丁目中町会・旧中在家東之町参拝。

二二日 BS 発団記念行事会議 日下権禰宜 西角神人出席。

二二日 土俵祭昇神之儀 立浪部屋参列。草薙会近畿支部役員会 万力 附柴権禰宜出席。

二二日 浪速学院理事評議委員会 神武権宮司出席。北海道小樽市住吉神社 宮司 星野昭雄氏参拝。

二四日 新年度新規採用神職研修 (三二日迄)。

二五五 皇學館大学評議委員会 宮司出席。

二六日 新年度新規採用神樂女研修 (三二日迄)。神社庁第九支部役員会 日下 福山権禰宜出席。

二七日 アサヒ飲料(株)「三ツ矢の日」参拝。

二八日 浅沢社月次祭。ことばの家諏訪 言語造形劇「を」とめとつるぎ」講座 小出権禰宜講師 (山中能舞台)。

二九日 真弓常忠大人命一年祭 宮司 神武権宮司参列 (真弓家)。坂之井千度講 解散奉告祭 久保田英嗣氏参拝。

三〇日 水木しげる生誕の地顕彰準備委員会 佐藤茂樹氏 (衆議院議員) 前田克巳氏 (間口グループ) 高野伸生氏 (住吉名勝保存会) 東郷信行氏 (同事務局長) 等 宮司面談。

三一日 職員辞令: 権禰宜 水野光一郎 権禰宜を免する (愛知県名古屋市中熱田神宮宮掌へ転任) ほか。

四月

一日 朔日祭・疫病流行鎮静祈願祭。職員辞令: 神人

西角吉貴を権禰宜、星野克補・鈴木康太・奥野就貴を神人、尾崎美優・渡邊希代果・森田知紗を神

樂女見習、神樂女 堤野真衣を主事補に各任ずる。権禰宜 附柴浩幹を年度課兼會計課、権禰宜 倉智

啓太・同 西角吉貴を奉養課、神人 星野克輔・同 鈴木康太・同 奥野就貴を祭務部勤務に各命ずる。

二日 住吉警察署 署長 宮本賢一氏以下着任挨拶 宮司面談。帝塚山幼稚園参拝。

三日 松苗神事 (朝日新聞社・岸の姫松講後援)・神武天皇陵遥拝式、松苗献木 岩根正尚氏・岸の姫松講講元 大賀信幸氏以下講員一九名参列。感染症

流行拡大防止のため選者・入選者の参列は中止。天位「一鍬に住吉の春動き出す」多田羅紀子氏、地位「すみよしは住みよきところ 苗木植う」堀江信彦氏、人位「この星と生きたるあかし苗木植う」佐藤憲氏。

五日 末廣堂前主人 故斉藤安弘氏 宮司 神武権宮司 小出権禰宜弔問 (白善社ホール)。

六日 正印殿祭。卯之日祭・疫病流行鎮静祈願祭。臨時部課長会議。(株)金剛組 代表取締役社長 多田俊彦氏以下就任挨拶 宮司面談。横貫芳子氏来社奉賛。

七日 住吉大社セミナー中止。

初辰祭 (疫病拡大の防止対策 祈祷受付対応)。故宇仁靖氏 (元住吉大社正禰宜) 神葬祭 逸見 中川権禰宜奉仕 (翌日迄)。

八日 政府、緊急事態宣言を發出 (大阪府を含む七都府県対象)。

緊急事態宣言による自粛要請を受け、本日より住吉大社瑞垣内及び外周門の全閉門、祈祷 神符 朱印等受付停止、職員特別勤務の実施。読売新聞

共同通信社 各取材。

九日 種貸社例祭。

一〇日 港住吉神社楠玉稲荷社例祭。市戎大国社月次祭。

一一日 五社春季例祭。

一二日 大海神社月次祭。

一四日 鉾社例祭。

一五日祭・疫病流行鎮静祈願祭。おいとしばし社春季例祭。大阪市役所へ雨合羽五三〇着分を寄贈 (大阪市長による医療現場の防護服の不足に伴う呼び掛けに対応)。

一六日 御田耕起 御田講員奉仕。

一八日 宿院頓宮 神仏合同国家安泰疫病退散祈願祭。

一九日 臨時部課長会議。

二〇日 海上交通安全祈願祭・疫病流行鎮静祈願祭。島津忠久公誕生記念祭。

二四日 通信祈祷の受付開始。

二八日 浅沢社月次祭。住吉大社名誉宮司 真弓常忠大人命一年祭 (神社葬祭 吉祥殿)。宮司以下参籠。

相撲会の彼方へ

八木意知男

はじめに

第二十六代継体天皇（男大迹天皇）は応神天皇五世孫の彦主人王の子。母を振媛という。彦主人王は越前国より近江国高島郡三尾の別業へ振媛を聘へ継体天皇を儲ける。継体天皇は応神天皇の血を継ぎ、故に、神功皇后そして住吉大神の血統者ということになる。

高島郡三尾の別業は、現高島市常磐木の式内三重生神社に比定され、明治初年迄は彦主人王命日の二月十八日が大祭「うし祭」であった。傍に彦主人王陵墓参考地（王塚古墳）を含む田中古墳群や継体帝出生時の「安産もたれ石」、そして継体帝誕生の際の胞衣を埋めたとする「胞衣塚」を近くに伝えている。すなわち、「三尾」と称する地は、現在に至るも極めて継体天皇色の濃い土地柄といい得よう。

次に、当該「近江国高島郡三尾」の地は、歌枕として扱われて来た。その証歌は次の如し。

『万葉集』巻七「羈旅作」、一一七一番歌

大御舟 竟而佐守布 高島之

三尾勝野之 奈伎左思所念

（『新校萬葉集』）

『拾遺和歌集』巻十、六〇五番歌

安和元年大嘗会風俗、みを山

よみ人しらず

（『大嘗会悠紀主基詠歌』では元輔）

たかしまやみをの中山そまたてて

つくりかさねよちよのなみくら

（『新編国歌大観』）

『壬二集』（家隆）冬部二六〇七番歌

三宮十五首歌の中に、冬の歌、

高島やみをの杣山跡たえて

氷も雪もふかき冬かな

（『新編国歌大観』）

右の中、『壬二集』のものは、『新勅撰和歌集』

巻六冬歌四一三番歌として入集する。冷泉天皇安和元年度大嘗会悠紀方風俗歌を承けて三尾の杣山を詠ったものであるが、家隆歌の第三句に「跡たえて」とあることにより時の流れが深く

思われる。

斯様にして継体天皇は近江国高島郡三尾の地に語り継がれているのであるが、その紹介が本稿の主目的ではない。ここでは継体天皇の御事跡と住吉大明神との関わりをほんの僅かに感じてみようとするものである。

一 継体天皇の詔

ア 継体天皇即位元年三月庚申朔

神 祇 には主^{きみ}乏^なしかるべからず。宇宙^{あめのした}には君無^{きみ}かるべからず。天^{あめ}、黎庶^{おほみたら}を生^なして、樹^たつるに元首^{えんす}を以^{もつ}てして、助け養^{やしな}ふことを司^{つかさど}らしめて、性命^{いのち}を全^{また}からしむ。大連^{おほむらじ}、朕^わが息無^{いきな}きことを憂^{うれ}へて、誠款^{まことこのころ}を披^{ひら}きて、国家^{くに}を以^{もつ}て、世^よに忠^{まめ}なることを尽^{つく}す。豈^{あに}唯^{ただ}朕^わが日^ひのみならむや。礼^{ことわり}の儀^{よそひ}を備^{そな}へて、手白^{まづ}香皇女^{かみみづめ}を迎^{むか}へ奉^{まつ}れ。

イ 同戊辰（九日）

朕^わ聞^{きこ}く、士年^{とことし}に当^{あた}りて耕^{たつ}らざる^{こと}有^あるときには、天下^{あめ}其^{その}飢^うを受^うくる^{こと}或^あり。女年^{めね}に当^{あた}りて續^つうまざる^{こと}有^あるときには、天下^{あめ}其^{その}寒^{ひや}を受^うくる^{こと}或^あり。故^{かれ}、帝^{すめらみこと}王^{みかど}躬^{みづか}ら耕^{たつ}りて、農業^{なりはひ}を勸^{すす}め、后妃^{きさきみづか}親^から蚕^{こがひ}して、桑序^{くはのとき}を勉^{すす}す

めたまふ。況^{いはむ}や厥^かの百寮^{ひゃくさう}、万族^{まんしやく}に暨^{いた}るまでに、農績^{なりはひをうむこと}廢棄^てて、殷富^{いんふ}に至^{いた}らむや。有司^{つかさ}、天下^{のたま}に普告^{のたま}ひて、朕^わが懷^{おも}はむことを識^しらしめよ。

ウ 即位七年十二月辛巳朔戊子

朕^{われ}天緒^{あまつひつぎ}を承^{うけ}けて、宗廟^{くにいへ}を保^{たも}つことを獲^えて、兢兢^{おそりあやぶむ}業^{このつら}。間者^{このつら}、天下^{あめ}安^{やす}に静^{しづ}かにす^{こと}たひらか^しは^しは^しと^しう。屢年^{しきり}豊^{とよ}ることを致^{いた}して、頻^{しきり}に国^{くに}を饒^たましむ。懿^よきかな、摩呂古^{まろこ}、朕^わが心^{こころ}を八方^{やふち}に示^{しめ}すこと。盛^{さか}りなるかな、勾大兄^{まがりのおほえ}、吾^{われ}が風^{かぜ}を万国^{ばんこく}に光^{あき}すこと。日本^{やまと}邕邕^{のくに}ぎて、名^な天下^{あきつしま}に擅^さなり。秋津^{あきつ}は赫^{さかり}にして、誉王^{ほまれう}畿^きに重^{おも}し。宝^{たす}とする所^{ところ}は惟^{ただ}賢^{けん}、善^{よき}するを最^{ひじり}も樂^{たの}しむ。聖化^{せいけ}茲^{こゝ}に憑^よりて遠^{まこと}く扇^{あき}え、玄功^{げんこう}此^{こゝ}に藉^{かか}りて長^{なが}く懸^かれり。寔^{まこと}に汝^なが力^{ちから}なる。春^{はる}宮^{みや}に処^あて、朕^わを助^{たす}けて仁^{めぐみ}を施^せし、吾^{われ}を翼^{たす}けて闕^{あやまち}を補^{おぎぬ}へ。

エ 即位二十一年秋八月辛卯朔

良^{すぐれたる}將^{いくさのきみ}の軍^{いくさ}すること、恩^{めぐみ}を施^{うつくし}て恵^{あは}を推^おし、己^{おのれ}を恕^{おもひ}りて人^{ひと}を治^{おさ}む。攻^せむること河^{かは}の決^さくるが如^{ごと}し。戰^{いくさ}ふこと風^{ふう}の発^はつが如^{ごと}し。大^{おほ}將^{きう}は民^{たみ}の司命^{しめい}なり。社稷^{くわい}の存^{くわい}亡^{しやう}、是^{こゝ}に在^あり。勗^{つと}めよ。恭^{あまづ}みて天罰^{あまつづみ}を行^なへ。

（以上何れも岩波文庫『日本書紀』）

以上、アゝエの詔は、何れも人の上に立つ者に言及している。アは「神祇には主乏しかるべからず。宇宙には君無かるべからず」といい、イは上に立つ者の率先垂範。ウには「宝とする所は惟れ賢しき」という。またエでは「大將は民の司命なり」といっている。善政をしき、国民に恤む為には良き人材を必要とし、それ故に「賢しき人は宝だ」というのである。

かかる御代であつたればこそ所謂四県割讓事件に際して物部大連鹿鹿火の妻が鹿鹿火を要め

夫れ住吉大神、初めて海表の金銀の国、高麗・百濟・新羅・任那等を以て、胎中誉田天皇に授けまつれり。故、大后息長足姫尊、大臣武内宿禰と、国毎に初めて官家を置きて、海表の蕃屏として、其の来ること尚し。抑由有り。縦し削きて他に賜はば、本の区域に違ひなむ。綿世の刺、詎か口に離りなむ、といふ。

（継体天皇六年冬十二月条。岩波文庫に依る。ただし、ルビを省略した部分がある。）

と伝う。物部大連妻が表向きに口を挿み国難を避け得たのである。

二 謡曲「岩船」へ

ところで、住吉「宝の市」の景色を伝える謡曲として『岩船』がある。

やてもわが君賢王にましますにより、吹く風枝を鳴らさず、民戸ざしをささぬ御代にて候。と始まるこの曲は、治政平安なる御代の宝の市を表出する。そして、この場には

また岩船の寄り来り候。

と、天の岩船が飛来する。

高天原と現世を往来する天岩船は、『神代紀』にも幾度か記されるが、『神武天皇紀』では玉依姫を母とする彦火火出見の天降に際して塩土老翁は

東に美き地有り、青山四周れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り。

と応じている。そこで例えば『延喜六年日本紀竟宴和歌』では

得神日本磐余彦天皇

従五位下大内記兼周防権介三統宿祢理平

とびかける天磐船たつねてぞ

秋津島には宮始めせる

（この歌、新古今一八六七番歌にも）

得櫛玉饒速日命

学生蔭孫従七位上藤原朝臣忠紀

そらみつに天の岩船下ししは

聖の御代を渡すとてなり

從五位上守左少弁藤原朝臣有相

降り来し天の磐船磐余彦

宮はじめせるしるべなりけり

とある。また、『万葉集』や勅撰集に次の如きを拾うことが出来る。

『万葉集』卷三、二九二番歌

角麻呂歌四首内

ひさかたの 天の探女之 石船乃

泊師高津者 浅尔家留香裳

『万葉集』卷十九、四二五四番歌

向レ京路上依レ興預作侍レ宴心レ詔歌一首并短歌

蜻島 山跡国乎 天雲尔 磐船浮 等母尔倍尔

真可伊繁貴 伊許芸都追 国看之勢志氏

安母里麻之 掃平 千代累 弥嗣継尔

所知来流 天之日継等 神奈我良 吾皇乃

天下 治賜者 物乃布能 八十友之雄乎

撫賜 等登能倍賜 食国之 四方之人乎母

安天左波受 啓賜者 從古昔 無利之瑞

多婢末祢久 申多麻比奴 手拱而

事無御代等天地 日月等登聞仁 万世尔

記続牟曾 八隅知之 吾大皇 秋花

之我色色尔 見賜 明米多麻比 酒見附

栄流今日之 安夜尔貴左

（短歌も存するがこれを略す
原則として漢字は現在通行字体に改めた）

『風雅集』卷十九「神祇歌」二二二番歌

題しらず

賀茂 遠久

久方の天の岩船こぎよせし

神代の浦や今のみあれ野

『新千載集』卷四「秋歌上」三三七番歌

だいしらず

左京大夫頭輔

七夕の天の岩船今度こそ

秋風吹きてまほにあふらめ

これ等の歌を見ると、「天の岩船」が飛び来る時、新帝誕生の予祝となったりしている。賀茂神と結び付くのは玉依姫の縁である。したがって住吉宝の市へ天の岩船を登場させる謡曲『岩船』の趣向は、極めて相応しいものとなっていると言ひ得る。

三 「相撲会」へ

そもそも住吉大社では古くから九月十三日を式日として「相撲会」が催されている（現在は十月十七日に宝之市神事を、近日に相撲大会を催行）。神功皇后由縁のこの「相撲会」に関してはこれまで様々に論じられて来ているが、採てて加えてここに一滴を認めて置きたいと考える。それは『古今著聞集』に見える一説話である。

橘成季が編し、建長六年（一二五四）に成つ

たとされる『古今著聞集』に次の話が載る。

佐伯氏長、始めて相撲の節にめされて、越前の国より上りける時、近江国高島郡石橋を過ぎ侍りけるに、清げなる女の川の水を汲みて、自らいたゞきて行く女ありけり。氏長きと見るに、心動きて、たゞにうち過ぐべき心地せざりければ、馬よりおりて、女の桶とらへたる^{かひな}脇のもとへ、手をさしやりたりけるに、女うち笑ひて、少しももてはなれたる気色もなかりければ、いとゞわりなく覚えて、脇をひしと握りたりける時、桶をばはづして、氏長が手を脇に挟みてけり。氏長興ありて思ふ程に、やゝ久しくなれども、いかにもこの手を放たざりける。引きぬかんとすれば、いとゞ強く挟みて、少しも引き放つべくもなければ、力及ばずして、おめくくと女の行くに従がひて行くに、女家に入りぬ。水うち置きて後、手をはづして、うち笑ひ、さるにもいかなる人にて、かくはし給へるぞと、いふけしき事柄、ちかまさりして堪へ難く覚えけり。我は越前の国の者なり、相撲の節といふ事ありて、力強き者を、国々より召さるゝ中に入りて参るなり、と語らふを聞て、女うなづきて、危なき事にこそ侍るなれ、王城は広ければ、世に勝れたらん大力も侍るらん、御身もいたくの甲斐無しにてはなけれども、さほどの大事に逢ふべき器にはあらず。かく見参しそむるも、しかるべきこと

なり、かの節の期日遥かならば、こゝに三七日逗留し給へ、その程にちとりかひ奉らんといへば、日数も有りけり、苦しからじと思ひて、心の留まるまゝに、いふに随ひて留まりにけり。その夜より、こはき飯を多くして喰はせけり。女自らその飯を握りて喰はするに、少しも喰ひ割られざりけり。始の七日はすきて、え喰ひ割られざりけるが、次の七日よりはやうく喰ひ割られけり。第三七日よりぞ、うるはしうは喰ひける。かく三七日間、能くいたはり養ひて、今はとくのぼり給へ、この上はさりともしこぞ覚ゆれと言ひて、のぼせけり。いと珍かなる事なりし。件の高島のおほる子は、田など多く持ちたりけり。田に水まかする頃、村人水を論じて、とかく争ひて、おほる子が田には当てつけざりける時、おほる子夜にかくれて、表のひろさ六七尺ばかりなる石の、四方なるを持て来りて、彼水口に置きて、人の田へ行く水を堰きて、我田へ行くやうに、横ざまに置きてければ、水思ふさまに堰かれて、田潤ひにけり。その朝村人共見て、驚きあざむ事限りなし。石を引き除けんとすれば、百人ばかりしても叶ふべからず、させば田皆ふみ損ぜられぬべし、いかゞせんとして、村人おほる子に降を乞ひて、今より後は、思し召さん程水をばまかせ侍るべし、この石除け給へと言ひければ、さぞ覚ゆるとて、又夜にかくれて引き除けてけり。その後は、永く水論する事なくて、

田やくることなかりけり。これぞおほる子が、力
頭しそむる始めなりける。件の石、おほる子が水
口石とて、かの郡にまだ侍るとなん。

当該『古今著聞集』の譚の時代は不明であるし、
相撲人としてのその後も不明である。しかし注目
すべきは、相撲人男が越前国人であることと、場
面設定が近江国高島郡三尾とされていること、に
ある。

越前は継体天皇が育った所であり、三尾は継体
天皇の父彦主人王の別業が存し、継体天皇が生れ
た地である。故に、この譚は継体天皇を想起する
に足るものを持つ。因みにいえば、三尾のおほる
子の「水口石」と称するものは、三尾里の安閑神

社（無格社）に神代文字石と共に伝承されてある。

おわりに

継体天皇若しくは継体王朝は大きな謎を含ん
でいる。為に、これに関わる論は枚挙にいとま
がない。本稿でここに参入しようなどという考え
は毛頭ない。

しかし、忘れてならないのは、継体天皇は正
史に依れば応神天皇の血統であり、延いては神
功皇后そして住吉大神につながる御存在である
点にある。そこで、住吉大社神事（行事）と触
れる幻の一コマを抽出してみたに過ぎない。

（京都女子大学名誉教授）



〈安閑神社社頭の力石（水口石）〉
おほる子が水論を制したものと伝う

新型コロナウイルス感染症にともなう対応について

令和2年の正月明けより、中華人民共和国の湖北省武漢市における新型コロナウイルスの感染流行が報道され、やがて日本の国内でも陽性反応の患者が出現し、またたく間に東アジアから欧米や中東で感染拡大が続きました。

当社では、昨年より社務所や神楽祈禱の待合室に、次亜塩素酸水による空間除菌脱臭機、アルコール消毒液等を順次設置しておりましたが、感染拡大の危機感が報道され始めた1月31日には、まず社頭受付勤務者にマスクの着用を開始させ、2月29日には全職員に対しマスク着用、アルコール消毒液の使用を励行しました。

3月2日の初辰まいりでは、毎月大勢の参拝客と祈禱で賑わい、祈禱も混雑と密集が見込まれるため、祈禱受付のみ対応となり、申し出分を順次ご奉仕する形式をとらせていただきました。3月17日の祈年祭（大祭）、そして20日の招魂社春季例祭も直会中止と致しました。また、大阪府より20～22日の三連休、そして28～29日の土日曜には外出自粛の要請がありました。

4月3日の松苗神事では、献詠入選者の招待を中止、6日の住吉大社セミナーも中止となりました。4月8日、政府による緊急事態宣言の発出を受けて、当社では瑞垣門および外周門の閉門、祈禱・神符・朱印等の社務受付の停止、職員出勤の削減、各団体の会議や出張の中止を実施いたしました。閉門や社頭受付の停止

という措置は、三密を避けることはもちろんのこと、外出自粛に呼応して参拝施設を閉鎖することは、まさに苦渋の決断でした。それでも、病氣平癒や安産祈願など祈禱の要望もあり、4月24日には通信祈禱の受付を開始しました。

閉門の最中、4月20日の島津家初代忠久公誕生記念祭の参列者案内中止、5月1日の初辰大祭の参拝中止（ただし、神職で祈禱者全名簿の祈禱奉仕）、同日の全国弓道大会の中止、5月12日の卯之葉神事も神事のみで、参列者の案内、舞楽、献茶、献香、奉納能などすべて中止となりました。ただし、閉門中でも毎朝の日供祭、毎月の朔日・卯之日・十五日祭、特殊神事の祭儀を厳粛に奉仕いたし、合わせて疫病流行鎮静祈願祭を奉仕しております。

6月より開門となりましたが、毎年多数の参観がある御田植神事の神事芸能等の中止（神職のみで奉仕）、7月30日～8月1日の住吉祭では規模を縮小、神輿渡御列および神賑行事の中止（鳳輦および神職のみで奉仕）となります。

ご崇敬各位には、日々のご参拝、祭典のご参列にご不便をお掛けいたしますが、なにとぞご理解・ご協力をよりしくお願い致します。一日も早く鎮静化し、事態が終息に向かいますこと、皆様が自由に行動できるようになることを祈念するばかりです。

住吉大社社務所

令和二年（二〇二〇）

下半期の祭事暦

7月7日（火）	10時00分	星宮例祭 ほしのみやれいさい	末杜星宮
7月21日（火）	10時00分	斯主社例祭 このぬしやれいさい	末杜斯主社
7月23日（祝）	10時00分	汐汲行事 しゆくみぎようじ	大阪湾
7月30日（木）	17時00分	神興洗神事 かみあらひしんじ	第一本宮
	17時00分	宵宮祭 よひみやさい	第一本宮
	17時00分	還霊祭 せんれいさい	第一本宮
7月31日（金）	10時00分	例大祭（大祭） れいたいさい	第一本宮
	17時00分	夏越祓神事 なごしのはらへんじ	五月殿前
8月1日（土）	10時00分	朔日祭・発興祭 さくじつさい はつこうさい	第一本宮
	11時30分	頓宮祭 とんぐうさい	宿院頓宮
	12時00分	荒和大祓神事 あらこのおほはらしんじ	飯匙堀
	13時00分	還興祭 かんようさい	第一本宮
8月7日（金）	10時00分	薄墨社例祭 うすすみやれいさい	末杜薄墨社
9月1日（火）	10時00分	楯社例祭 たてやれいさい	末杜楯社
9月9日（水）	10時00分	志賀神社例祭 ししがじやれいさい	摂社志賀神社
9月19日（土）	10時00分	児安社例祭 こやすやれいさい	末杜児安社
9月22日（祝）	10時00分	皇靈殿遥拝式 すうれいどうえんはいしき	神楽殿
	11時00分	招魂社秋季例祭 しょうこんじしゅうきれいさい	末杜招魂社
10月1日（木）	18時00分	観月祭 かげつさい	第一本宮
10月9日（金）	10時00分	大蔵社例祭 おおぞしやれいさい	末杜大蔵社
10月13日（火）	10時00分	大海神社例祭 たかいだじやれいさい	摂社大海神社
10月15日（木）	11時00分	おいとしばし社秋季例祭 おししやうきれいさい	おいとしばし社
10月16日（金）	10時00分	龍社例祭 りゅうさい	末杜龍社
10月17日（土）	10時00分	御田刈祭・神宮神嘗祭遥拝式 みたくりさい じんぐうかみめさい しようはいしき	五月殿
	10時00分	宝之市神事 たからのいちしんじ	第一本宮
	10時00分	（引き続き）	
10月19日（月）	10時00分	后土社例祭 ごんどしやれいさい	末杜后土社
10月21日（水）	10時00分	船玉神社例祭 ふねたまじんじやれいさい	摂社船玉神社
11月1日（日）	10時00分	五社秋季例祭 ごししやうきれいさい	末杜五社
11月3日（祝）	9時00分	明治祭（中祭） めいしさい	第一本宮
11月15日（日）	9時00分	七五三祝祭 しちごさんいわいさい	第一本宮
11月23日（祝）	10時00分	新嘗祭（大祭） にいのみめさい	第一本宮
12月26日（土）	15時00分	煤払式 すすはらいしき	四本宮
12月31日（木）	17時00分	大祓式 おほはらしき	境内
	17時00分	除夜祭 じよやさい	第一本宮

※住吉祭の神賑行事は中止、そのほか祭礼の神賑行事・奉納行事も変更の可能性
があります。

元祖 さつま焼（登録商標）



さつま焼はその昔
住吉の物産であつたさつま芋を
形どつたなにわの味、
昔からの銘菓であります。

十勝小豆を精製した
淡泊な味のこしあんを、
秘伝の皮で包み、
心を込めて、一本一本竹串に刺して
焼き上げております。

幾星霜の老舗の味をご賞味ください。
摂津一之宮 住吉大社御用達御神饌調達処
御菓子司 株式会社 末廣堂

本店 大阪市住吉区東粉浜三丁目一ノ二一四
TEL 〇六（六六七）四四二八
〇六（六六七）八八三〇
FAX 〇六（六六七）三〇一九

第34号の表紙『浪速之古図』（住吉御文庫・特一六一）第四図より

古来、難波の海（大阪湾）は島々が点在する神聖な海であった。
本図は、かつての難波八十島の様子を想像して描かれたもの。

日本の伝統
花嫁の正統。

令和二年(2020) 7月1日発行(年2回発行)

発行人

高井道弘

発行

住吉大社

住所

大阪市住吉区住吉2丁目9番89号

Tel

06・6672・0753

印刷

真生印刷株式会社

 住吉大社吉祥殿

Tel 06-6675-3591 fax 06-6675-3311

URL <http://www.sumiyoshitaisha.jp>

〒558-0045 大阪市住吉区住吉 2-9-89

住吉大社吉祥殿まで(水曜定休日)